

学校史資料の発見と教材化

— 歴史学習を中心に —

地理歴史科（世界史） 石 出 みどり

1. はじめに

歴史学習とは歴史認識・世界認識の形成であり、地域史はそのよい教材となり得る。しかし本校生徒の通学区域は、徒歩通学の近距離から時に新幹線通学者も出る関東近県の広範囲に及び、生徒は実感を持って理解し得る共通の生活区域や歴史体験を持ち難い。そこで地域教材になり替わるものとして、本校の学校史資料の教材化を考えた¹。

本校は明治5（1872）年創立の官立女学校（のちに東京女学校と改称）を前身として、1882（明治15）年東京女子師範学校附属高等女学校となった。母体である東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）は、1875（明治8）年創立のアジア最初の女子師範学校であり、本校・本学の歴史は日本の近代化の歩みとも言える。

この恵まれた学校史を教材とするねらいは、ひとつに近現代史と学校史、また日本史と世界史を重ね、結ぶことによって、自己につながる歴史として過去を実感、認識し、未来の主体的な歴史形成者としての自覚を養うこと、そして、世界史が日本史をつくり、日本史が世界史をつくる相互の関係を実感し、考察を深めること、つまりは時空の交差上に自己を認識することである。

実践例は「ヒトラー・ユーゲントがお茶高にやって来た」（『研究紀要』第54号2008年度）²、「一学校史を学ぶ— 新入生対象「お茶の水女子大学附属高等学校の歴史」の授業」（『研究紀要』第56号2010年度）その他で報告した。本稿では学校史資料の発見と教材化の周辺の事柄について、補足する。

2. ヒトラー・ユーゲントの来学・来校（1938年）

「ナチスの政権掌握」の授業では、ナチスの党組織である突撃隊や親衛隊とともに、青少年組織であるヒトラー・ユーゲントとドイツ少女団を取りあげる。たまたま『お茶の水女子大学附属高等学校創立百年誌』の年表で、ヒトラー・ユーゲントの来日時、1938（昭和13）年9月21日に彼らが本学・本校を訪れたことを知り、資料を探した。高校内で発見できたのは、1941（昭和16）年卒業の久野俊子さん寄贈のアルバムの写真A、B、校友会会誌『お茶の水』第45号、第46号³掲載の作文・「学校日誌」・写真・「ヒトラーユーゲント歓迎の歌」⁴等である。ハーケンクロイツ（鉤十字）のナチスの旗と日の丸が掲げられた徽音堂の舞台にユーゲント一行が並ぶ写真や作文は、大きなインパクトを与え、その調査、探究の過程も含め上記の目的をかなえる教材となった。

しかし、来校時の写真はわずか2枚でもの足りなく、気になっていた。2012年11月23日の創立130周年記念祝賀会の日に、「出席者の中で私たちが最高齢の卒業生だそうです」とおっしゃる1940（昭和15）年卒業の渡辺寿美子さんとお会いした。「そ

れならばヒトラー・ユーゲント来校時の写真をお持ちではありませんか」と尋ね、後日在校時のアルバムごと本校に寄贈していただいた（写真C～H、渡辺さんのアルバムの貼り付けはA、C、D、B、E～Hの順）。未見の貴重な写真であったため、お茶の水女子大学大学歴史資料館に連絡し、2015年3月写真資料の電子化が行われた。

渡辺さんのお話によると、写真屋さんが撮影した写真を購入し、高等女学校時代のアルバムに保存されていたとのことである。ボンネットバスでの一行の本館前到着や本館に入る様子、弓道場やプールでの見学など、校友会会誌『お茶の水』第46号巻末の「学校日誌」の記録どおりの行動を見ることができる。

2013年度の授業からは、「去年まではユーゲントの写真はこの2枚だけでしたが、今年は別の写真もあります。どうしてこの写真が見つかったかと言うと…」と進めた。大学構内の風景も高校同様当時と変わらず、来校の実感はよりリアルになった。また近々の後日談を示し、探究に終わりが無いことも示唆した。一方で、こうして資料が増えてくると、授業の教材は目的、効果を考え、精選が必要となる。

大学の歴史資料館に保管されている当時の「学級日誌」（後述、先の「学校日誌」とは異なる生徒が記録する日誌）には、来校前の2日間昼休みに徽音堂で「ヒトラー・ユーゲント歓迎の歌」の練習をし、前日の9月20日には「奥田良三先生が来てくださいました」（「本一菊」、「本科一年菊組」の意）（写真I）ということ、当日来校前に12時半から大掃除があったこと（「本四菊」）、当日「歓迎の歌」を二度歌った（「本一菊」）ことなども書かれている。

「ヒトラーユーゲント歓迎の歌」は、校友会会誌「お茶の水」に「下村壽一先生作詞、小林耕輔先生作曲」の楽譜が載っていたことからこの歌を歌ったと考え、授業では事前に合唱部の生徒に楽譜を渡し、歌わせていた。しかし次に記す卒業生への取材では、「『燦たり、輝くハーケンクロイツ…』を歌った」とのお話があった。もしこの詞ならば北原白秋作詞、高階哲夫作曲による歓迎歌「万歳ヒトラー・ユーゲント」である。この歌は藤原義江の歌でレコード発売され、ラジオでも流れたという。どちらの歌だったのだろうか。ユーゲントは3ヶ月間滞在し全国を廻り、熱烈に歓迎された。全国に流れた白秋作詞の歌との混同、思い違いだろうか。

さて卒業生への取材とは、9で詳述する当時高等女学校2年生に在籍した長屋公子さん、真木彩江さん、横地栄枝さんへの取材である。「（ユーゲント来校は）生徒にとっては日々あるたくさんの行事のひとつで、特別ということではなかった。」「プラジルからのお客さまなど、来客、視察はいつもありました。」「ユーゲントは白い制服で、日本の中学生よりは、かっこいいなと思いました。」「（彼らは）リラックスしていました、自然でした。」このような印象は写真に見る彼らの様子や、会誌の作文に「お行儀が悪い」とあることと重なる。

また学校が彼らに女子生徒の水泳をプールで見せたことについては、泳いだ当事者ではなかったが、「当時は半ズボン型のゾロとした水着で、少し恥ずかしいけれど、先生にやれと言われればやりました、そういうものだと思っていました。」と答えら

れた。そして彼らの訪問は、「小学校から大学までの女子学生がいるから、本校を選んで来させたのではないのでしょうか」と話された。

本学・本校訪問では聊か異なる部分があったにしろ、ヒトラー・ユーゲントの規律正しいふるまい、統制のとれた団体行動等は日本政府に衝撃を与え、教育政策に大きな影響を与えた。1941（昭和16）年3月、政府は国民学校令を発し、従来の尋常小学校を廃して国民学校とし、「教育の全般にわたって皇国の道を修練」させることを目的とする学校、国民の基礎を錬成するための学校へと改めた。子どもたちは「少国民」、すなわち「年少の国民」とされ、心身を鍛え、次世代の戦争の担い手となることが強く求められた。儀式や団体訓練、勤労教育はいつそう重視された。この教育政策の転換の観点から、日本史学習でもユーゲントの来校を絡めることができるだろう。

なお矢越葉子・平松左枝子・奥田環・鷹野光行「資料で見る東京女子高等師範学校と戦争」『お茶の水女子大学博物館実習報告』第21号（2006）によると、附属幼稚園には来校時使用されたハーケンクロイツをかたどった旗が残され、1938（昭和13）年11月発行の『児童教育』第32巻第11号にはここに挙げたものとは異なる写真（小学校訪問か？）と歓迎歌が掲載されている⁵。

3. ヘレン・ケラーの来学・来校（1937年）関連

ヒトラー・ユーゲント来校の資料収集のため、当時在校していた卒業生の方々に前述のインタビューした折り、話は前年の1937（昭和12）年に来校したヘレン・ケラーに及んだ。

「どうしてユーゲントのことなどお聞きになるのですか。ユーゲントよりもヘレン・ケラーの来校の方がずっと印象深かったです。」

「そうです。私たちは皆とても感動し、あと後まで興奮が残りました。ヘレン・ケラーの本もたくさん出ました。」

「ヘレン・ケラーは、来る前から『三重苦の聖女』『聖母』と大騒ぎでした。」

「お話はヘレン・ケラーの話を女性が英語に訳し、その英語を日本人の男性が日本語に訳すというように、通訳が2回入りました。」

「ヘレン・ケラーは女性の口と頬に手を当てて聴いていました。ヘレンのことを女性が英語に訳す時、ちゃんと訳しているか手を当てて聴いていました⁶。」

「ヘレン・ケラーは小学生の合唱の時は、ピアノに上から手を当てて聴いていました。」

「当時日本では障害者のことを片輪、ちんばと馬鹿にしていたのに、ヘレン・ケラーは立派な人でした。」「今でいう認知症の人を、田舎ではお蔵に閉じ込めていたのですから。」

ヘレン・ケラーは1880年、アメリカ合衆国南部のアラバマ州に生まれた。日本で

は明治13年、本校創立の2年前である。1歳7ヶ月の時に高熱を発症して視覚、聴覚、言語の三重の障害を負ったが、6歳の時に家庭教師アン・サリヴァンと出会い、厳しく献身的な教育と強固な意志によって障害を克服した。1900年にラドクリフ女子大学（現在はハーヴァード大学に統合）に入学、1904年に卒業した。そして合衆国国内のみならず世界各地を訪問し、障害者の福祉の向上や教育に貢献し1968年87歳で死去した。

その生涯は「奇跡の人」の名で1959年に戯曲となり⁷、映画化もされた。ヘレンには重篤な障害を努力で克服した聖女のようなイメージが作られているが、大学卒業後は積極的な社会運動家となった。身体の障害は個人的な問題ではなく、原因の多くは無知や不十分な栄養状態、不衛生、教育や治療を受けられないことなど、貧困、社会的不平等にあると考えたのである。社会主義を支持して1909年にアメリカ社会党（Socialist Party of America）に入党し、女性参政権運動やマーガレット・サンガーの産児制限運動、公民権運動に参加した。性や避妊を口にすること、黒人の人権を認めることは当時大きな抵抗を受け、若年労働や死刑制度への反対、資本主義への批判も人びとの反発を呼んだ。第一次世界大戦では戦後まで一貫して社会主義の立場から反戦を訴え、中傷された。また第二次世界大戦では傷病兵を精力的に慰問して励まし、戦後は南アフリカのアパルトヘイト政策も批判するなど、彼女の生涯は社会的運動なしには語れない。

ヘレンの来日は1937（昭和12）年と戦後の1948（昭和23）年、55（昭和30）年の3回で、本学・本校を訪問したのは最も長く4ヶ月間滞在した初回の1937年4月である。アン・サリヴァンは前年に亡くなり、秘書のポリ・トムソン⁸が彼女を支えていた。サンフランシスコから船で2週間の長旅⁹は、障害を持つ者にどのような旅であったのだろうか。来日は1934年に訪米してヘレンに会った日本ライトハウスの創業者岩橋武夫が、日本の盲人のために強く求めたものであった。

これまでヘレン・ケラーについては新入生対象の学校史の授業で、有名人の来校・来学の中での紹介しかしていない。しかし広く障害者の福祉に貢献した人というだけでなく、社会活動家、社会主義者として、また反戦を訴え続けた人、ヒトラーとムッソリーニを批判した人¹⁰、1936年7月に始まったスペイン戦争ではフランコら反乱軍と闘った共和国政府、人民戦線を支援した人であることを示すことによって、来校時の記録から彼女の思想や当時の日本の状況を考えさせることもできるだろう。

当時の日本は来日前年の1936（昭和11）年には2.26事件が起きて陸軍の政治的発言力が飛躍的に強まり、滞在中の7月には盧溝橋事件をきっかけに日中全面戦争がはじまった。ヘレンはフランクリン・D・ローズヴェルトと1929年のニューヨーク州知事就任時より親交があり¹¹、来日時は大統領となった彼の親書を携えたアメリカ政府の使者でもあった。日本政府は警戒しつつも国賓待遇で接した¹²。彼女は何を考えていたのだろうか。

渡辺さんから寄贈されたアルバムにはヘレン・ケラー講演会の写真が2枚（写真J、

K) あり、会誌『お茶の水』第39号(昭和12年5月発行)¹³には、1937年4月26日¹⁴の徽音堂での「ヘレンケラー女史講演會」の記録が写真入りで掲載されている(資料1)。30分遅れての開会から、トムソンによるヘレンの生い立ちの紹介、そして

問「ヘレンよ、貴女は、日本に来て、如何に楽しいか。」

答「日々の新しさ、心からなる歓迎に感動す、又櫻の花を愛づ、特に、新宿御苑の花の美しさ。そして、又これから咲く季節の花を望んでゐる。」

等ヘレンとトムソンの一連の対話、ヘレンによるメッセージ、小学生の校歌合唱、記念品贈呈まで、およそ1時間であったという。女子校らしく、ヘレンとトムソンの服装も記されている。録音機のない時代の詳細な記録は、速記のように筆記したものだろうか。

この日の「本五菊」の学級日誌(写真L)には、午前中の「代数」「幾何」「家事/割烹」に続いて4時限に「11時40分の電鈴で体操場集りに」、主事先生より翌日の臨時大祭とヘレン・ケラーについての話を聞き、午後1時半から講堂で講演を聞いて、「何ともいへない親しみと温かさを覚えた」こと、「三重苦の聖女」と言われるヘレンに接することができて、嬉しく、ありがたく思ったことが書かれている。

ヘレンはメッセージで「二つの聲」「二つの光」「二つの道」があることを挙げ、「私は貴女方が責任にたじろがぬことを信ずる、進んで人生の道を開き、高い理想を以て身につけることを望む。貴女方若い人々には、この人生をより明るく文化的にする義務がある。私は若い貴女方と同じ道を進んであると思ふ故に、私の今申しあげた言葉を忘れずに覚えていて下さい。有難う。」と結んだ¹⁵。当時の時代背景を学び、ヘレン・ケラーの社会運動家としての側面を知った生徒は、これをどのように受け取るだろうか。

7月までの3カ月間、ヘレンは札幌から長崎まで各地を訪れ、エキストラ講演も含めると117回の講演を行ったという¹⁶。そして盧溝橋事件から2日後の7月9日、植民地の朝鮮、「満州」、台湾訪問に出発する。会見時に髭に触ったという林銑十郎首相は、6月近衛文麿首相に交代していた。ヘレン一行は灯火管制下の列車に兵士とともに乗り、群衆が「万歳、万歳」と叫ぶ声を聞いた。講演先では灯火管制で明かりが消された観客席に向かって話した。また、戦争で両国に目が見えなくなったり、耳が聞こえなくなったりするかもしれない人びとがいることを思って心を痛め、ヘレンは戦争の回避を望んだという。

日中全面戦争によって旅行の行程は切りあげられた。来日時と様変わりした帰国時の簡素な新聞記事を示し、ヘレンの扱いの変化¹⁷に注目させ、そこに照射される日本を考察させることもできるだろう。

授業で障害者の歴史、社会福祉の歴史を具体的に取りあげることが少ないが、女性の歴史や子どもの歴史の研究が進み、授業でも取りあげられるようになってきたよう

に、今後はその機会が増えていく。また障害者、社会的弱者を主体的な活動者として知ることも重要である。

なお、お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ¹⁸には「ヘレン・ケラー来校写真」が7枚紹介されている。

4. 南京占領（1937年）

写真Mは資料室に保管されていた2枚の布である。薄手の赤色の木綿に「奉祝南京陥落」の大きな白抜き文字が浮かぶ。向こう側が透けて見える薄さだが、丁寧に保存されたまま、あまり使われていない印象であった。上部に細棒と紐が付いていたことから、社会科教室の後ろ壁に掛け撮影した。

授業では1937（昭和12）年7月7日の盧溝橋事件から日中全面戦争が始まり、中華民国の首都南京占領へと進んだことを示し、日本国内では「南京陥落」を今か今かと待ち望んでいたこと、戦勝祝賀には日本各地で「日の丸」の小旗を振る旗行列や提灯行列が行われ、本校生徒も参加したことを、昭和12年度の卒業アルバムの二重橋前で祝う写真その他で示す（写真N）。そして「資料室でこんなものを見つけました…」と細棒を芯に巻かれた布をとりだし、前方の生徒に手伝わせてくるくと解き、高く掲げて見せる。

しかし旗というには大きさも不自然で、布地に耐久性はなく、用途が不明であった。その後お茶の水女子大学デジタルアーカイブズを閲覧し、「東京女子高等師範学校 南京陥落奉祝旗行列写真帖」¹⁹の項より旗行列の幟（のぼり）として使われたことが判明した。アーカイブズの冒頭の写真は出発前の集合風景だが、この幟を少なくとも8本確認でき、2枚同じ布があった理由もわかった。

以下「南京陥落奉祝旗行列写真帖」より、1937年12月14日の25枚の写真に付けられたキャプションを示す。

1. 前夜午後十一時過ぎに入った南京陥落の報をうけ、「奉祝南京陥落」の幟を押し立て、日の丸の小旗を打ち振る旗行列が実施された。翌朝の集合時間は七時半であった。
2. 正門から出発する様子。八時頃。安藤坂から飯田橋に出、九段・お堀端を経て、宮城を目指した。
3. 旗行列には女高師の教官・生徒ばかりでなく、附属高等女学校の生徒・附属小学校の児童も参加した。
4. 皇居前広場（二重橋前広場）着。奥に二重橋と伏見櫓が写る。
5. 整列し、最敬礼ののちに校長の発声で万歳三唱。十時頃。
6. 皇居外苑を行進する一行。持っている旗より、附属高等女学校の生徒であることが判明する。
7. 皇居外苑を行進する一行。先頭を歩く附属小学校の児童。奥に桜田門楕形が写る。

8. 皇居外苑を行進する一行。附属高等女学校の生徒。奥に桜田門柵形が写る。
9. 皇居外苑を行進する一行。女高師の教官および生徒。奥に桜田門柵形が写る。
10. お堀端を行進する一行。
11. 靖国神社へ詣でる一行。先頭に行く教官と附属小学校の児童。
12. 靖国神社へ詣でる一行。女高師の生徒。
13. 靖国神社社殿前にて万歳三唱。
14. 靖国神社参拝後の一行。附属高等女学校の生徒。十一時頃。
15. 神楽坂・江戸川橋・護国寺前を経て、女高師を目指す。
16. 正門に帰着した一行。一時半頃。
17. 帰校した一行と出迎える人々。
18. 帰校した一行と出迎える人々。
19. 帰校した一行と出迎える人々。
20. 帰校した一行と出迎える人々。
21. 帰校した一行と出迎える人々。
22. 旗行列に加わる幼稚園児。
23. 一行は本校運動場を一周した。
24. 万歳の発声をする校長下村寿一。
25. 本校運動場にて万歳三唱。

これらのキャプションと写真によれば、1937年12月13日深夜11時過ぎに南京陥落の報を受け、翌14日朝7時半集合、8時頃出発。正門を出て安藤坂から飯田橋、九段・お堀端を経て、宮城に向かい、10時ごろ皇居前広場（二重橋前広場）到着、万歳三唱。皇居外苑をまわり靖国神社参詣、神楽坂・江戸川橋・護国寺前を経て帰着、参加者は女高師の教官・生徒、附属高等女学校の教官、生徒・附属小学校の児童で、帰校後は幼稚園児も参加して運動場（大学グラウンド）へ向かい、万歳三唱したことがわかる。

写真を見ると、男性教員は正装、あるいは準じる姿で、多くは帽子を被っている²⁰。コート着用の者も、また途中で脱いだのかコートを手に持つ者もいる。女性教員の中には和装もあり、下駄のようなものを履いているが、16キロ（後述）を行進するのは大変なことであっただろう（写真〇）。高等女学校の生徒はセーラー服の制服姿で、襟巻やショール、手袋など防寒具は見られない。帰着した本館前の金木犀の前には、「銃後の護を固めませう」という大看板が立っていた。

つづいて大学の歴史資料館に保管されている附属高等女学校の学級日誌を調査した。学級日誌は1935（昭和10）年から1952（昭和27）年まで、本科5学年分の蘭・菊2クラス²¹と専科3学年分の家事部、国語部の学級日誌が学期ごと残されている²²。現在の学級日誌と同様に、名簿順に生徒が1名ずつ記入しているようである。

旗行列当日12月14日火曜日の記載は、下記のとおり10クラス中5クラスが1行程度の簡単なものとなっている。対して「本二菊」（本科2年菊組）は8行、「本一蘭」（写

真P)は10行、最上級生の「本五蘭」(写真Q)と「本五菊」(写真R)は12行の欄をすべて使いきって書いている。この日の天候は「晴」であった。

「南京陥落奉祝旗行列を致しました」(本四蘭)
「七時三十分より 南京陥落奉祝の旗行列がございました。」(本四菊)
「南京陥落したので全校で旗行列を致しました。午前七時半集合八時出発 午後二時解散」(本三蘭)
「南京陥落奉祝の旗行列を致しました。」(本三菊)
「午前七時三十分 本校運動場に集合して、旗行列を致しました。午後一時半にかへって米(まい?)りました。」(本二蘭)
「今日は喜びの南京陥落祝賀大行進を行ひました。七時半集合、小學校を先頭に、そろつて校門を出ました。宮城遙拝、靖國神社參拝をして、四里の道を一人の落後者もなく、元気に歸校致しました。
本日定期試験のほすでございましたが、明日にのびました。」(本二菊)

今と同じように、この時期は2学期の期末テストがあった。「本五菊」の12月11日土曜日のページには「定期試験の第一日、歴史の考査がございました。」とあり、「本二菊」にあるように試験は延期されて、旗行列が行われた。

そして、「本一蘭」の12月13日月曜日のページに「旗行列が明日あるといふお知らせをいただきました。」とある。前日の下校前に翌日の旗行列のお知らせがあったという記述は、前掲のアーカイブズの写真キャプション1「前夜午後十一時過ぎに入った南京陥落の報を受け」と食い違いがある。キャプションの出典は不明で、「南京陥落の報」を誰がどのように受けたのかもわからない。

1937年7月7日、北京郊外で起きた盧溝橋事件をきっかけに戦線は上海に拡大し、近衛文麿内閣は「暴支膺懲(暴れる中国を懲らしめる)」の声明を発表して日中全面戦争を展開した。日本国内は勝利と戦争終結を意味するはずの首都南京の攻略を心待ちしたが、中国の抵抗は激しく、ようやく「南京完全占領」の公電を大本營が天皇に内奏したのは12月13日の深夜11時15分であった。順序としてはこれを受けて昼の旗行列、夜の提灯行列の祝賀があるわけだが、人びとは待ちきれず、数日前から祝賀行列を始めていた²³。

12月8日の読売新聞第二夕刊には、警視庁には旗行列の許可願が殺到し、午前中に丸の内の「日立製作所の各工場全員八千名、日本橋東株従業員七千名の豪華提灯行列を始め東京女高師の職員生徒千五百名の旗行列等の届出があり所轄署に届け出た各團體、各町會は許可次第に即刻實行だと早手廻しで待機の姿勢だ」とある。続けて12月14日の読売新聞朝刊に、「そら來たゾ“公電” 南京完全落城に沸く陸海軍 けふこそお預け萬歳の爆發だ」の見出しがあり、抑えきれず12日に一般の団体の祝賀を認めていた警視庁も、公電が来たことにより「官公署の奉祝もよろし」と官公庁に奉

祝を解禁したとある。こうして、いよいよ東京全市で盛大な祝賀行列が行われた。

新聞にあるように、東京女子高等師範学校が8日に警視庁に旗行列の許可願を出し、準備をしていたならば、13日に翌日の旗行列を生徒に伝えたところ、その日の深夜「南京完全落城」の公電が飛び込み、運よく真っ先に翌14日の朝8時から旗行列を行なった、ということなのだろうか。

「本一菊」の日記（写真S）には行進の経路が丁寧に記され、往路は「精華高女」²⁴、復路は「白百合高女」²⁵で各1回休憩をとったこと、「旗行列に参加しない方は学校で自習」したこと、「今日は教室当番は致しませんでした。」と「当番」（清掃か）をしなかったことが書かれている。さらに最も詳細な記述の「本五菊」（写真R）には、「歸途は櫻田門から九段へ出て靖国神社へお詣りし、大日本帝国萬歳を唱へ、それから白百合高女で休息をとり、そこでは紅白のお祝餅を頂いて皆、等しく今日の喜を頷ち合ひ、正午に再び行進を開始して…」と小腹を満たす機会があったことがわかる。天長節や紀元節など学校の厳粛な式典の際には、饅頭や餅など生徒を喜ばせる食べ物が用意された。「本一蘭」の日記には、帰校後「それから本校のグラウンドで女高師の萬歳を三唱して、終わり、御辨當を頂いて歸りました。」とある。

また「本五蘭」（写真Q）には「…行進は本當に嬉しく、十六軒（キロ）の行程も少しの苦にもなりませんでした。」と、「本二菊」の「四里の道」と重なる記述がある。当時と今日を単純に比べることはできないが、16キロの行進は容易ではない。ましてや小学生も参加した。帰校した時にはへとへとであったらうし、キャブション23の「一行は本校運動場を一周した。」は辛かったのではないだろうか。朝7時に集合して、帰校は「一時半頃」「二時近く」である。「四里の道を一人の落後者もなく」（本二菊）には驚く。そして欠席者や学校に残り自習していた生徒もいたこと、半数のクラスは簡潔な記録に終わっていることにも目を留めたい。

この旗行列は重要な学校行事であったため卒業アルバムに写真があり、校友会会誌『お茶の水』第44号（昭和13年3月20日発行）には、専攻科1年生の「よくぞ日本に生まれたる」という作文が載っている

日中戦争における南京占領を取りあげる際、現地の様相を知らされぬまま国民が全国各地で大々的に戦勝を祝い、本校でもこのように「奉祝」したこと、それは何に繋がっていたのかを、これらの学級日誌や写真、作文を通して考えさせたい。

5. 「戦闘用主要毒瓦斯標本」「投下弾説明標本」

第一次世界大戦（1914～1918年）はヨーロッパを主戦場としたが、塹壕戦により長期化したことから毒ガス、戦車、飛行機による偵察、爆撃など様々な新兵器が登場した。毒ガスは比較的安価で大量殺人が可能なことから各国が開発を急ぎ、防毒マスクなど毒ガス防御の研究も進んだ。

「戦闘用主要毒瓦斯標本」「投下弾説明標本」（写真T、U）は物理・化学・地学準備室に保管されていたものを譲り受けた。同じ大きさ（52×37×5センチ）、形の木

箱入りだが、箱書きはなく、背部には紙がはがされた跡がある。様相からして昭和の時代の教材と思われるが、確証はない。²⁶

授業では「第一次世界大戦当時ではなく、昭和の教材ではないかと思うが」と断ったうえで、各種の毒ガスを紹介し、なぜ「窒息性」「中毒性」「糜爛性」毒ガスだけでなく、「クシヤミ性」毒ガスや「催涙性」毒ガスが開発されたのか等考えさせる。イペリットガスはベルギーの戦場イープルで最初に使われたことによる命名で、「投下弾説明標本」の下段左「防毒」には、イペリットガスによって無残に爛れた手の被害写真が載っている。

生徒は「この毒ガスは本物ですか」などと言いながら重い箱を回覧していくが、戦前の生徒が毒ガスの教育を受けたことを知り、その教材の「標本」そのものを手にすることは、歴史と直接触れ合う実感を与える。「本物」「実物」であることに加えて、自分の母校に繋がるものであることの意味も大きい。

6. 黎明期の女性科学者保井コノ、黒田チカ、マリー・キュリー

保井（やすい）コノ（1880～1971）は香川県に生まれ、日本で最初の博士号をとった植物学者である。また黒田チカ（1884～1968）は佐賀県出身の化学者で、保井コノに続く日本で2番めの女性理学博士である。共に明治10年代に生まれ、本学の前身の女子高等師範学校理科を卒業して日本を代表する黎明期の女性科学者となり、昭和40年代に没した。

歴史的事実としても、生徒のロールモデルとしても、著名なマリー・キュリー（1867～1934年）と同時代に日本にも優れた女性科学者たちがいたこと、女性研究者への偏見と妨害の中で自らの道を選び、生きたことを紹介する。また物理、化学、生物の授業で先達の女性研究者たちにふれることも重要だろう。

教材化のきっかけは「ラジウム発見100周年」記念講演のため、1998年にキュリー夫妻の長女イレヌの娘で核物理学者のエレヌ・ランジュバン＝ジョリオが本学に来校し、講演を聞いたことである。授業では当初マリー・キュリーと絡め、この講演のエピソードや写真、本学制作のパンフレット『女性科学者の源流』²⁷、エレヌさんの来日当時の新聞記事を教材にした。また、夫ピエールの事故死後のマリーと物理学者ポール・ランジュバンのエピソードは少女向きの伝記には載らない大人の話だが、と夫を失った当時の女性の立場の一面を伝える話も紹介した。そしてエレヌさんの名字に注目させると、彼らの巡り合わせに声があがる。

また多くの死傷者が出た「第一次世界大戦」の授業では、マリーと長女イレヌが最新式の放射線装置を自動車に積んで各地をまわり、外傷の治療活動に成果を挙げたこと、「フランス人民戦線内閣成立」の授業では、ファシズムに反対して人民戦線を組んだレオン・ブルム内閣が、フレデリック・ジョリオと結婚したイレヌ・ジョリオ＝キュリーをブルム内閣の初の女性閣僚（科学担当）に登用した²⁸ことを、この内閣の性格を示すエピソードとして添えることもできる。

保井コノと黒田チカについては、3年生必修「現代社会」の憲法学習で女性の権利を学ぶ折りの教材のひとつとした²⁹。保井が執筆した高等女学校用「物理」の教科書を、女子にこのようなものが書けるわけがないと認めてもらえなかったこと、保井はアメリカへ、黒田はイギリスへ留学したが、「女でありながら留学まで望むからには結婚せずに生涯研究を続けるべし」という暗黙の制約があったことなど、大変な苦勞のもとで勉学し、研究と教育を続けたことを紹介する。

教材には前出のパンフレット『女性科学者の源流』を借用していたが、2007年3月当時の永野肇校長³⁰が卒業式祝辞（資料2）で両氏を紹介されたことから、この原稿をいただいて2007年度以降の必修「現代社会」の授業で毎年事前学習の課題として読ませ、感想を提出させている。手元の2012年度3年生の感想（資料3）を読み返すと、受験を前にして勉学、教育の意義、自己の将来、日本社会のあり方を考える良質の教材になっていることがわかる。

7. 教育勅語、天皇・皇后肖像画、天長節

教育勅語について学ぶ際、その内容とともに下賜された勅語がそれぞれの学校でどのように扱われたかも取りあげる。教育勅語の写しの写真や石造りやコンクリート製の奉安殿の写真はその資料となるが、本校・本学では徽音堂（講堂）の前面上方の左右に明治天皇、皇后の立位の肖像画³¹が掛かり、紀元節や天長節等の祝日の儀式の際にはその「御帳」が開いて肖像画を現し、教育勅語が奉読された。祝日は現在のように休日ではなく、登校して厳かに式を挙げ祝う日であった。

昭和天皇の誕生日である4月29日天長節の「専三家」（専科家事部3年生）の学級日誌（写真V）には式次第が記され、生徒は徽音堂で行われた儀式の様子をリアルに想像することができる。日記中の「唱歌（勅語奉答）」とは、「阿やにかしこき 天皇の」に始まる物部安房（勝海舟）の作詞で、本人による書掛軸が大学に所蔵されており、これもデジタルアーカイブズで見ることができる³²。

8. 校歌「みがかずば」

「アメリカ合衆国の独立」の授業では、最後にアメリカ建国期の精神が明治早期より日本で知られることとなり、敗戦まで広く日本人に影響をもたらしてきたこと、本校の校歌もその流れの中にあると考えられることを紹介してきた³³。アメリカ合衆国建国の父のひとりベンジャミン・フランクリンの「13の徳」とあわせて昭憲皇太后（明治天皇皇后）の「十二徳」の和歌、勤勉の徳を説く皇后下賜の校歌「みがかずば」³⁴、文部省唱歌「金剛石」を紹介し、アメリカ合衆国建国期の精神がなぜ、どのようにして明治時代の国民への教訓と結びついたのか、国民はなぜ受け入れたのかと、疑問を投げかける。

仲介者はおそらく本学東京女子師範学校開校時の初代摂理（学長）を勤めた中村正直だろう³⁵。彼は幕末イギリスに留学し、1871（明治4）年にサミュエル・スマイル

ズの『セルフ・ヘルプ』を『西国立志編』として翻訳、出版し、『学問のすすめ』と並ぶベストセラーとなった。教訓の普遍性や儒教道徳との重なりもあるが、アメリカ合衆国独立 100 年後の日本で受容、浸透したことは興味深い。「13 の徳」から「十二徳」へと 1 つ削られた徳は何かも含め、考えさせる。

9. 卒業生インタビュー

作楽会の協力を得て、2009 年 11 月 16 日、卒業生の長屋公子さん（専攻科国語部卒業）、真木彩江さん（専攻科家事部卒業）、横地栄枝さん（専攻科家事部卒業）にお話を伺った。1937(昭和 12)年に東京女子高等師範学校附属高等女学校本科入学、1942(昭和 17)年本科卒業、そして 1945(昭和 20)年に専攻科を卒業したこの学年は 1924(大正 13)年生まれの学年で、ヘレン・ケラー来校時は本科 1 年生、ヒトラー・ユージェント来校時には本科 2 年生であった。

この時の目的はヒトラー・ユージェント来校についての情報収集だったが、お話の内容は多岐に亘った。興味深い内容のため以下小学校時代から順に紹介する。録音せずに取材したため、文責はすべて筆者にある。

「附属小学校は当時実験的な三部制の学校で、『一部』は女子のみ 41 人、(ここから)高等女学校進学には 1、2 名が落ちる、『二部』は男女混合クラスで、1・2 年、3・4 年、5・6 年の複式学級で人数は少なかった。『三部』は男女半数、15 人ずつで 30 人。男子がいると女子は強くなった。女子も半分は外の学校に出なければならない。成績が 1 番から 7 番までが附属高等女学校へ行ける。父母会では『〇番です』と言われた。」「『一部』の人は、ほとんど上へ行けるから、のんびりしていました。」

「皇后の行啓は 4 年ごとにあり、四つん這いで廊下の掃除をしました。お土産にする人形の服を課外授業で作られました。かわいいので差し上げました。」「運動会にもいらっしゃいました。」「皇后行啓の令旨(れいし)は甲高いお声でした。男子が笑って叱られました。皇后は臙脂のロングドレスでした。」「虎屋の練りきり(3 個入り)を、陛下のお土産とっていただきました。」

「小学校 4 年生の時学校が大塚に来て、グラウンドができました。でも運動会は御茶ノ水のころから明治神宮のままで、戸山の軍楽隊が演奏しました。女学校に入学したころ、運動会をここでするようになりました。」「明治神宮での運動会の観覧券を親戚に渡しました。」「グラウンドのスタンドの上の方に、皇后の行啓がありました。」「大塚に来て、羊羹みたいな学校になっちゃって…。(簡素な長方形の校舎のことか?)」

「大塚の校舎には、お弁当を温める部屋があり、廊下には柵がありました。」「廊下は何回も何回も油拭きして雑巾が真っ黒になりました。生徒はお手伝いさんのいる家ばかりでした。」「女学校での髪型は最初はおかっぱで、髪が伸びるとふたつに結び、編めるようになると三つ編みにしていきました。他校よりは自由でした。」「通学時のオーバー、セーターも自由でした。制帽は紺のつば広で、少し前下がりのもの。三越

や松屋のデパートで買えましたが、ヨシザワのものがかっこよかった。ダブルステッチでした。」

「制服は3種類で、1つはセーラー服にバンド、これがいちばん多かった。つぎがオーバーブラウスとスカートにバンドで、これは少なかった。3つめがジャンパースカートとバンドで2番めに多かった。」「私はジャンパースカートを自分で縫いました。」「博多織のベルトは1年生の時は太いベルトで、専攻科に進んだ時は細くなりました。バックルの金属供出のためです。」「スカートは每晚寝押しして、襷を整えました。」「土曜日に映画に行く時は、ベルトをはずして（どこの学校かわからないようにして）行きました。30銭でした。」「専攻科と合わせ8年通いましたが、専攻科へ行くとパーマネントをかけてお洒落になりました。」

「湯浅年子先生はフランス留学から帰っていらして、本科で数学、専攻科では化学を習いました。外国旅行の話をせがみ、キュリー研究所のことも聞きました。尊敬できる美しい先生でした。」「英語の木村ふみ先生は、留学されて立派なキングスイングリッシュで、1年生からなるべく日本語を使わない授業をされました。」「戦争中も『敵を知るには英語を』と勉強を続けました。」「自由な学校生活でした。」

「当時は子どもでも軍人のいろいろに嫌なことがありましたが、黙っていました。」「附属小学校からの友人の×さんが戦争を批判して特高につかまり、牢屋に入れられました。どこを特高が歩いているかわからない時代でした。」「表には出さない、口には出さないでいて、いつも『二重』でした。」「当時の日本は今の北朝鮮のようでした。」

「島崎藤村は『夜明け前』で、表面のうねりの下で生きてきた人間が本当の人間と言っています。戦争を生き延びた人びとは、表面のことだけではありませんでした。」

「三国同盟は日本が背伸びしたとしか思えません。英米への対抗からのことで、ドイツ、イタリアと結んでも何でもないのに。講和の良い機会があったのにミニタリズムが勝って、できませんでした。今の北朝鮮と同じです。日支事変（1937年以降の日中全面戦争）のころは戦争はそれほど大変ではありませんでした。西洋のまねをして領土を取ろうとしました。外国にもひどいことをしたのだらうと思います。しかしその時は悪いことをしているとは思いませんでした。」

「私たちは昭和6（1931）年小学校入学の年に満州事変があり、昭和12（1937）年日支事変、昭和16年の女学校5年生の時に大東亜戦争が始まりました。どんな時代になっても、知恵があるから生きていけると思います。」

話の中の「バンド」「ベルト」は、同じものを指している。バンド（ベルト）の博多織の布地は6センチ幅であったが、物資の不足により半減して3.5センチに幅が狭まった。また金属供出のため徽章のバックルは廃止になり、10センチほどの布地のみの袖章が徽章代わりとなった。

制服については、『お茶の水女子大学附属高等学校創立記念百年誌』に1930（昭和5）年に標準服5種が制定され、1932（昭和7）年4月よりそのうちの2種（セーラー服

とジャンパースカート) が制服として残ったことが記されているが、「オーバーブラウスとスカート」の制服があったという記録はない。なかなか手がかりがなかったが、1943(昭和18)年3月発行の報国会誌『お茶の水 創立六十周年記念号』(第56・57号)³⁶に、「昭和七年四月制定の通學服は昭和十四年度迄實施された。然るに戦時下物資節約とス・フ織物使用の関係よりこの通學服は改善の必要を感じ、昭和十五年度に至り次の圖のやうな通學服を考案實施した。」にはじまる説明と図を見つけた(資料4)。ブラウスにも冬の上着にもベルト通しの紐が着いている。なお本校の制服、服装に関連する資料として、難波知子「女学生服装の移り変わりー和装から洋装へー」(『目で見える文京区の100年』(郷土出版社)がある。

10. その他

・120周年記念バッグ(通称「お茶高バッグ」)について

創立120周年の2002年、自治会が通学かばんの作成を企画、実現した過程と教員会議の対応の経緯を記録した³⁷。

・ダンス「ファウスト」について

戦後1948年に始まった本校のダンスコンクールは、2009年に第60回を迎えた(1949(昭和24)年は「東京女高師創立75周年・お茶の水女子大学開学記念」の祝賀大運動会のため、1970(昭和45)年は高校紛争のためすべての学校行事が中止となったため、2回開かれぬ年がある³⁸)。その記念の特別プログラムのために、簡単な資料を作成した(資料5)。

・学校新聞『お茶の水』関連

1950年創刊の学校新聞『お茶の水』を整理、収集し、創立130周年記念事業の一環として「学校新聞『お茶の水』記事一覧」(『創立130周年記念誌』所収)および縮刷版を作成した³⁹。

・本校の沿革、校歌、校章について

本校の創立について、1872(明治5)年開設の官立女学校が前身であること、現校歌の作曲者は東儀季熙の原曲を明治29年(1896)年に西洋風の旋律に改めたものであること、当初の制服に用いられたベルトのバックルの校章は徽章であることなどがわかるように学校要覧、生徒手帳などの説明を改訂した⁴⁰。

・東京オリンピック(1964年)のランニングシャツ(写真W)

体育館の体育準備室に同じもの3枚が保管されていた。市販、あるいは聖火リレー用のシャツだろうか。すべてSサイズということは女性用ということか。用途、保管の経緯等不明である。

・「新設農場について」校友会誌『お茶の水』第47号(1937年3月発行)

1937(昭和12)年4月、勤労鍛錬道場として農場(東村山市萩山の現郊外園)が開設されるにあたっての紹介がある。

11. おわりに

本年1年間の授業の終わりに、授業について印象に残ったことを書かせた中に、次のようなものがあった。

「お茶高の歴史とからめて、長い歴史があり、校舎もそのまま、掘り出すと何か出てくる (!) お茶高らしい授業でした。今は自由な学校も、昔は軍国主義の風潮が流れていたのだと卒業アルバムからもわかり、不思議でした。」

「南京陥落の時の幟を見せていただいた。まさか当時の幟を見せていただけるなんて、びっくりした。このように普通でないレアな授業方法がすごくためになってよかった。」

「資料が手元にまわってくる。実際に近くで細かいデータを見られるから。」

「世界史という歴史の中に出てくるヒトラー・ユーゲントがお茶高に来ていたなんて、一気に歴史が身近に感じられた。またたくさんの資料を見せていただき、読み込むことができとても興味深かった。」

「ユーゲントの授業でお茶高の歴史がとても長く、伝統のある学校だったことを知り、さらにこの学校、そして歴史そのものへの興味が深まった。」

「世界史とお茶高を結びつけて、過去のお茶高から当時の世界情勢を見いだすのが、自分が生まれる前の世界を身近に感じられて印象に残った。」

冒頭にあげた学校史資料の教材化の目的、すなわち現在を生きる自己につながる歴史として過去を実感、認識し、未来の主體的な歴史形成者としての自覚を養うこと、世界史が日本史をつくり、日本史が世界史をつくる相互の関係を実感し、考察を深めることは、概ね達成されていると考える。教材化の過程では『創立百周年記念誌』、『創立120周年記念誌』、『創立130周年記念誌』、卒業アルバム、自治会会誌の前身である校友会会誌『お茶の水』、学校新聞『お茶の水』、お茶の水女子大学歴史資料館に保管された貴重な学級日誌、歴史資料館の折々の展示、お茶の水女子大学デジタル・アーカイブズ、お茶の水女子大学資料委員会そして作楽会と卒業生の方々の協力に助けられた。数年前、石井朋子副校長の時代に高校に資料室が設置されたことの意義も大きい。そして生徒が日々暮らす校舎や大学構内、講堂である徽音堂がほとんど姿を変えずに80年以上存在していることは、何物にも代えがたい。

また資料調査の過程で出会った阪本越郎校長⁴¹による「お茶の水女子大学文教育学部 附属高等学校の沿革」(『紀要』第8号、1962年度)、創立60周年記念号の報国会会誌『お茶の水』(第56・57号、1942年度)からは、手に取られるのを待っていたという声を聞いたかのように思えた。特に後者は戦中の厳しい状況下での労作である。

資料の整理や発掘、保存には多くの時間と人手、費用がかかり、容易ではない。価値に気づかず失なわれたものも多いただろうし、階段下倉庫から発見した重い段ボール

箱一杯の戦前の大判の地図数十枚（最上段の一枚は「満州国」の詳細な地図で、中国の地名がすべて日本名に書き替えられていた）が、箱ごと行方不明になってしまったのは思い出す度に惜しい。一方で理科、数学（戦前の女子用の数学の教科書を教材として使わせていただいた）、保健体育など他教科の教員の協力はありがたかった。

また、2001年から2006年にかけて、お茶の水女子大学大学資料委員会が悉皆調査を行い、図書室、各教科の準備室、倉庫等の資料を調査し、データベース化されたことにも大いに助けられた。貴重な資料が埋もれたままにならぬよう、蘇らせられないものかと考える。歴史資料館の「学級日誌」、司書室に保存されている校友会会誌『お茶の水』については、ごく一部しか調べることができず、同窓会である作楽会の会誌『作楽』にも手が及ばなかった。

本校の歴史を学んだ生徒の中からは、文化祭に学校史関連の企画を出す者、映像作品のテーマに使う者、学校新聞で取りあげる者が生まれ、またある卒業生は大学の課題レポート「戦後における日本とアメリカの関係変化」を作成するにあたり、在籍時に配布された創立130周年記念誌の「学校新聞『お茶の水』記事一覧」に見る戦後の日米関係の変化を考察し、書いた。

生きている限り自分は何者かという問いは付いてまわるが、学校生活は人間形成の母体の重要な柱のひとつである。時間軸と空間軸がなす広大な座標の中に自己の位置を知り、世界に広く羽ばたいてほしい。

<参考文献>

矢越葉子・平松左枝子・奥田環・鷹野光行「資料で見る東京女子高等師範学校と戦争」
『お茶の水女子大学博物館実習報告』第21号（2006）

奥田環・矢越葉子「女高師と皇室 —大学資料調査の成果と課題—」

お茶の水女子大学『人文科学研究』第4巻（2007年版）2008年3月発行

奥田環・石井朋子「学校史資料の電子化 —その意義と活用—」

お茶の水女子大学附属高等学校『研究紀要』第56号 2010年度

山崎邦夫編著『年譜で読むヘレン・ケラー』明石書店 2011年

キム・E・ニールセン

『ヘレン・ケラーの急進的な生活「奇跡の人」 神話と社会主義運動』明石書店 2005年
筑摩書房編集部『ヘレン・ケラー 行動する障害者、その波乱の人生』筑摩書房
2014年

石出みどり・仰木ひろみ・小山一成・難波知子・山崎範子

『目で見る文京区の100年』郷土出版社 2014年

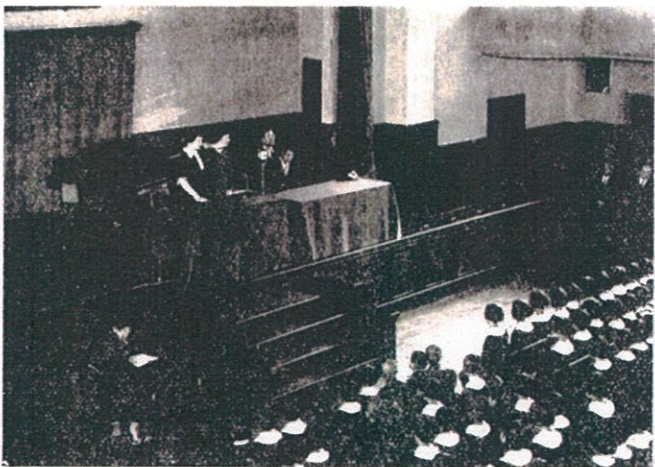
ヘレンケラー女史講演會

四月二十六日午後一時半世界の盲目の母、ヘレンケラー女史を迎へてトムソン嬢及び岩橋武夫氏の御通譯によつて、私達は偉大なる女史の天分と努力との賜物である所の奇蹟の聲（一般に言はれてゐる）を聞くことを得ました。

午後一時の豫定で私達は一時十分前に講堂に入り來賓の方も一時には、すつかりお入りになりました。時刻を待つばかりとなりました。けれども豫定は、三十分遅れて、一時半、満面にこぼれる様な笑みを湛へたヘレンケラー女史は、濃いブルーの洋服、附添ふトムソン嬢の緑色の洋服。たとひ目は見えずとも耳は聞えずとも、それは、全く、普通の否それ以上に何か尊いものを感じさせました。

校長先生の御紹介、女史の略歴及びサリヴァン先生の偉大さ、トムソン嬢について、簡單にお話しがあり、終つて、私達は、いよ／＼一語も御座をきゝ洩らすまいと、緊張いたしました。最初はトムソン嬢のケラー女史の生ひ立ちについてのお話でありました。

「生れた時は、健在であつたが生後僅かに十九ヶ月にして不幸にも熱病のために視力聴力を失つて、物言ふ術をも失つたこと。七歳の折に初めて、サリヴァン先生に逢つた。それまでは手まねのみ、空腹の時には、口をおさへる様にしたこと。けれどもケラー女史は、



（てに堂音徴）史女 - ラケ・ンレへの校來

非常に、やんちゃな子であつた。そして、女史が初めて知つた文字は、人形 (doll) の字でした。それもサリヴァン先生が何度か同じことを手の掌に書いて、諷解することに努めたのです。先生が物には、すべて名があるといふ、物を諷解することに光明を得たのは、或日サリヴァン先生は、ポンプの傍にケラー女史を連れて行つて、

水口の下に手をおかせて、水を流し、あいてゐる片方の手の掌に水といふ字を、何度も書いたのです。先生は驚き手を引こめられましたがしかしそこに光明が諷解するといふことが出来て來たのです。それからの進歩は全くすばらしいものでした。書くことの自由を、持つた女史は、更に他の人が自分を違ふといふことを知りませんでした。でサリヴァン先生は、他の人々は口によつて、話すことをお教へになりました。自分も亦さうした人達と、同じ様にしたい氣持から話すことを教へて、くれと、ねだられました。そして、最初に出た言葉は「H」の言葉でした。唇に手をあて、H・Pの音を鼻にかゝる音は鼻に手をあて、胸に手をあて、Kの音を知りました。そうして、一字から一言へ一言から一文へ涙くまい努力が報はれて、最初に、女史の口をついて、流れ出たひと言は「私は啞でない」の言葉でした。それから五十八歳の今日まで女史のたどつて來られた道はほんとに長くいたましい、苦しみの道でありました。そうして、今日では普通の人達と同じ様に話すことが出来ます。かうして、ト

ムソン嬢の話されてゐる間、女史は常に鐘の類に手を當てゝ居られました。次いで女史と、トムソン嬢との間に二三の質問が交されました。

問 ヘレンよ、貴女は、日本に來て、如何に楽しいか。

答 日々の新しさ、心からなる歓迎に感動す、又櫻の花を愛つ、特に、新宿御苑の花の美しさ。そして、又これから咲く季節の花を望んでゐる。

問 ヘレンよ、貴女に花のちがひがわかるか。

答 匂ひのかくはしき、花の形のちがひによつて知る、日本の花は香高い。そして生花の模様はなつかしい。

問 こゝには多くの先生や生徒さんがゐるが貴女の教育について一言。

答 私は、文學、歴史、數學、ラティン語、ギリシヤ語、フランス語を學んだが私の最も好きなものは哲學であり、嫌ひなものは數學であつた。

問 ヘレンよ、貴女が専門學校にゐる時、サリヴァン先生は如何にして勉強をたすけたか。

答 サリヴァン先生は、教科書、及新聞雜誌の論文等を一々手の掌に書いて指文字で教へました。教室で講義をきく時には、指文字で覺え、歸つてから點字にかきなほした。そのために、記憶力の

増進に非常な力があつたと思ふ。

問 ヘレンよ、貴女は盲目であることを不幸と思ふか。

答 いゝえちつとも、目があつても完全に見えない人はなほ不幸であると思へます。

對話を終りメッセージにうつりました。

メッセージ一親しい友よ。やさしく温かい歓迎は、なつかしく、

私は感謝の言葉を知らない。

私は若い婦人の前に話すのを大變に喜ぶ――。

私は二つの聲が貴女方を呼んでゐると言ひたい。一つは自分勝手な聲一つは誠意人道の聲である。

人生に失敗してもそこに尊いものあれとねがふ――。

二つの光、道が水平線上にある、一つは、唯物主義、腕力によるもの、一つは、人道主義、兄弟愛によるものと貴女方はどちらをおゑらびになるか、二つの光のゑらび方から、二つの人生が出来て来る。一方の道をおゑらば、低く、幼い子供等の叫び苦しみの聲があり男女の罪惡を持つてゐる。今一つの道は高く我等をみちびき人道の輝ける歌はひびく。

正しき仕事、努力は永遠の命を以て報はれる――。

かうして、私はこれらの言葉を心からの喜びを以て、貴女方に傳へたい。そうして同時にねがひたい。

人生の道を、とほ／＼と歩み又沈黙しつゝ暗い道を進む人のあることを――。

貴女方が二つの光、道のどちらをゑらぶかを私は知ることが出来る。何となれば貴女方は偉大なる英雄の娘であるから。

私は貴女方が責任にたじろかぬことを信ずる、進んで人生の道を開き、高い理想を以て身につけることを望む。

貴女方若い人々には、この人生をより明るく文化的にする義務がある。

私は若い貴女方と同じ道を進んでゐると思ふ故に、私の今申しあげた言葉を、忘れずに覚えて下さい。有難う――。

終つて、小學生の校歌合唱がありました。ケラー女史は、それを手拍子でとつて居られた。そして「音楽は私に、デリケートな感情を抱かしめるから好きである。」と言はれました。次いで記念品贈呈が代表者の手によつて行はれ、女史は「美しい贈物は大變にうれい。私はこれを思ひ出として、故郷にもちかへらう」と言はれ、傍にある藤の鉢桶を、嗅いで藤であることをあてられました。そして割れる様な拍手の中をサヨナラの言葉をのこして、長の旅にお疲れもおみせにならず、手をふりあげながら元氣にかへつて行かれました。時に二時二十五分でありました。

まことの不具者でありながら偉大なる人格と教養をヘレンケラー――

女史に對しても、満足に育つた、私達は、もつと／＼しつかりした氣持で正しい仕事に努力しなければならぬと思ひます。

記念品贈呈

本校より タッシヨン二
女學校より 紙入、ハンドバッグ
小學校より 草履、お手玉
幼稚園より 鯉のぼり、カパー。

舊師よりのお便り

春めいてまゐりました。お惡もあらせられませんか、學友會誌を先日、わざ／＼お送り下さいまして、誠に有難うございました。早々とお禮申し上げたいと存しながら、つい延引いたしました。其後益々御盛で、はるかに、心嬉しくおよろこび申し上げます。又京へお出いたゞける時になりました。お待ち申し上げて居ます。

四月二十一日

かしこ
(平田ふみる先生より)

新學期を迎へられ皆様には、感々御希望新に御勉強の御事とお喜ばしく存じ上げます。

扱て本日は校友會誌「お茶の水」を御送りいただき誠に嬉しく、早速拜見いたしました。御心にかけて送られて適々と御送りいただきました事、厚く御禮申し上げます。



毎夏プールで水泳のコーチをして下さつた作樂會員、田中融子さん(舊姓、竹内)を此の度マニラにお迎へして、共にお茶の水を語ることが、出来誠に嬉しく思つて居ります。

(木對タキ先生より)

P.O.Box No. 125 Manila P.I.

平成 18 年度 お茶の水女子大学附属高等学校卒業式
(平成 19 年 3 月 20 日午前 10 時 00 分)

学校長のことば

どうぞお座り下さい。

ただ今卒業証書を授与された 117 名の皆さん、卒業おめでとうございます。また、ご列席の保護者の皆様、ご家族の皆様にご心からお祝いを申し上げます。

3 年前、大きな希望とちょっぴりの不安をもって高等学校に入学して来た皆さんが、今、こうして高等学校を卒業し、新しい世界に進もうととしています。卒業生の皆さんはひとしおの感慨をもって高等学校から巣立って行くことだと思います。

ところで、卒業される皆さんにとって、卒業式とは何なのでしょう。1 年生と 2 年生の時の卒業式では、先輩を送り出す立場にあった訳ですが、自分自身が卒業して行く今日の卒業式をどのように考えているのでしょうか。私は、卒業式には時間と場所の区切りをつけるという重要な意義があると思っています。明日からは、もう高等学校の生徒ではなく、今日までの 3 年間を過ぎた校舎を飛び出して、活躍の場を求めて新しい世界へと踏み出すための区切りであり、けじめである言えると思います。是非力強い一歩を踏み出して下さい。

さて、皆さんは、卒業後には進学し更に勉学に励むことになるのですが、我が国において女性が大学に入学することが正式に許されるようになったのは何時からでしょうか。ご存知でしょうか。皆さんは、今では大学で学ぶことが当たり前のことと思っているかも知れませんが、女性に大学入学の門戸が開かれたのは、第二時世界大戦後のことです。もちろん大学は遠く明治の時代からありましたが、女性には開放されていませんでした。私立の大学も同様で、「学問のすすめ」を著し、平等の理念を説き、男女の権利・義務に違いのないことを表明した福沢諭吉により創立された慶応義塾大学においても女子学生の入学を正式に許可したのは昭和 21 年(1946 年)のことです。

女性の大学入学の公認は、敗戦後の教育改革の先駆けとして、昭和 20 年(1945 年)10 月の女子教育振興に関する閣議決定によりなされています。閣議決定の内容は次の 4 点です。

1. 男女教育の機会を同じくすべきこと。
2. 女子の帝大への入学を許すことを公認すること。
3. 独立した女子大学の設置を促進すべきこと。ちなみに、お茶の水女子大学が新設されたのは、昭和 24 年のことです。
4. 女子のための高等学校を設置し大学への道を男子同様にすること。

これを聞いて、皆さんはどう思われますか。

2番目に「女子の帝大への入学を許すことを公認する」とあるように、政府としては公認していなかったのですが、大正2年（1913年）から東北帝国大学には女子学生が入学しています。創立間もない東北帝国大学が、独自の判断で4人の女性の受験を認めたのですが、入学試験のさなか、文部省は「元来女子を帝国大学に入学せしむることは前例これ無きことにて頗る重大なる事件これあり大いに講究を要し候」云々と事情説明を求める書簡を大学に送っています。大学は、委細かまわず、黒田チカ、牧田らく、丹下ウメの3名の合格を発表し、日本初の「女子学生」が誕生しました。黒田チカが29歳のときのことです。3人は、大学卒業して日本初の「学士」になっています。

黒田チカは、後に母校東京女子高等師範学校、今のお茶の水女子大学ですが、その教授となり、紅花の色素に関する研究等の研究で業績をあげ、昭和4年（1939年）に日本国内で2番目の女性理学博士になっています。黒田先生45歳の時のことです。東北帝国大学において真島利行先生という良き師に巡り会ったのも幸いしたのですが、この時代にあつて女性の男性に伍して研究を続けることは並み大抵のことではなかったと思います。お茶の水女子大学では、日本初の女性博士である保井コノ先生（生物学）と日本初の女性教授でもある黒田チカ先生（化学）を記念して、保井・黒田奨学金をつくり、毎年優れた若手の女性研究者に贈っています。また、東北大学には、黒田賞が平成11年に設けられています。

話が長くなってしまいましたが、皆さんが当たり前のことと思っている大学への入学も、こうした先人の努力があつたればこそであり、同時に、皆さんの家族をはじめ周囲の温かい支援があればこそ勉学に勤しむことができるのであつて、どうぞこのことを心に刻み、しっかりと勉学に励んで下さい。

もう一言皆さんに申し上げたいことは、是非健康に気を付けて下さいと言うことです。健康で、体力があれば、気力も漲って来ます。そこで初めて、頭が働くことになります。私は、化学と言う実験系の研究を行つており、一に体力、二に体力、三に体力をモットーに、毎日実験に勤しんでいました。このことは実験に限ったことでなく、何ごとを為すにも、体力が第一です。卒業にあつての皆さんへの餞の言葉として、「よく食べ、よく学べ」と言いたいと思います。

最後になりましたが、お茶の水女子大学附属高等学校で3年間学んで来たことに自信を持ち、この伝統ある高等学校の卒業生であることを誇りに、自主自律の気概を持って各々の道に邁進されることを願つて止みません。

本日は、卒業おめでとうございました。

これで、卒業式の言葉と致します。

（永野 肇）

資料3

◆受験勉強のため机に向かっていると、たまに「自分は本当に大学に通いたいのだろうか？親の敷いたレールに沿って進み、友人も皆その道を選択しているから成り行きで大学進学を考えているだけではないか？こんな中途半端な人間に学問を修める資格はないのではないか？」と思い悩むことがある。永野前校長の「学校長のことば」を読み、それは贅沢な悩みで、そんな生ぬるい気持ちで勉学に取り組むのは、道を切り開いてくれた先輩に失礼であると気づいた。きっかけは自分の意思ではなかったとしても、与えられた機会を利用して精一杯勉強したい。

◆大学・短大進学率が6割近い現在、お茶高生はもちろん、私の周りにいる子達は皆当たり前のように大学に進学する道を選ぶ。その環境の中で、私は大学に行く意味が見出せなかった。なぜ、皆が皆当たり前のように進学するのか、当たり前のように進学を勧めるのか。高校に入ってからずっと、大学に行く意味を考えてきた。そして、ようやく大学に行く意味が見つかった。

私は大学に、「勉強」をしに行くのだ。大学で勉強をするのは普通に考えると当たり前なことだろう。では、いったい普通とは何か、当たり前とは何だろうか。私が言いたいのは、当たり前を当たり前として受け止めるのではなく、何でも一度は自分で考えてみることの大切さだ。そうしてたどり着いた答えは、誰のどんな言葉よりも自分の中に響くものがある。自ら勉強をしに行くのだと自覚したことで、実際に大学に行ってやりたいことが明確になり、有意義な学生生活が送れるのではないかと胸が高鳴るのを感じる。永野前校長先生の言葉を読んで、また新しく、大学に行けることの有難みや先人が残してくれた素晴らしい機会に対する感謝の気持ちを感じることができた。

◆永野先生のことばの中で一番私にとって衝撃的だったのは、「…前例これ無きことにて頗る重大なる事件…」というフレーズだ。当時の偏見がとても分かりやすくあらわれていると感じた。しかし、今私が何の抵抗もなく「偏見」という言葉を使うことも、「偏見」なのかもしれない。「偏見」の対になる言葉は、「平等」ではなくて、「当たり前」なのだと再度認識できた。

その「当たり前」を覆した人々を、本当に尊敬する。女性として初めて大学に入学した三人の女性、そしてそれを受け入れ側の大学の、「学びたい」「学ばせたい」という強い意志と体力が、逆境に立ち向かわせたのだと考えると、研究に興味がある私としてはなんだかとても嬉しく、また理想にしたいと思った。

◆「学校長のことば」の中でも印象的なのは「先人の努力があつたればこそ」という部分だ。男女平等が半ば当たり前になった今日を生きる私でもその有難みがわかるのは、おそらくそれが「与えられた」権利でなく先人が努力の末に「獲得した」ものだからではないかと私は思う。逆に言うと、先人の努力がなければ

男女平等はずっと叶わぬままだっただろうと薄々感じているのだ。

そして「学校長のことば」を読んだとき、そのことと同時に今の自分が何かを獲得するために努力できているだろうかという疑問や不安も感じた。何もせずに待っていても自分にとって有利な状況は降ってこない。先人が私たちに男女平等を残してくれたように、自分も後世まで残るような「獲得」を、もしくはせめてそのための努力を、できる人間になりたいと思った。

◆私はこの言葉を読み、思い出した1つの事例がある。それは、第二次世界大戦中において、反ファシズムを唱えながらも特攻隊として戦死した兄、つまり男性と、お国の為に死ぬことを美德と考えていたその妹、つまり女性の対比である。兄は慶應義塾大学経済学部で学んでいた。一方、妹は軍国的教育しか受けていなかった。

このことから、大学という場は義務教育や国家の洗脳から離れ自らの思想を形成する場であるとわかり、当時女性に大学入学の門戸が開かれていなかったことは、女性を無知にしておくための国家の戦略だと思った。現在における女性も大学で学べるという現状に感謝し、大学に行ったら自分のため、自らの属する共同体のため、そして社会のために有益となる4年間を過ごしたいと思った。

◆私は永野前校長のことばに挙げられた保井コノに関する書籍（『科学する心 日本の女性科学者たち』岩男壽美子他）を読んだ。日本女性として初めて理学博士の称号を授与された彼女は、こう言った。

「名も求めず、地位も願わず、ただ自分の仕事が残ってゆけば、それだけで自分は満足できると信じております。」

結局のところ、学問をするうえで重要なのは、その人の性別でも、それに伴う利益でもなく、学びたいという純粋な気持ちなのだと思う。中学、高校、大学と、男女問わず当たり前のように進学していく今日において、私たちは学ぶことへの喜びを忘れてはいないだろうか。こうした先人の存在を知ることによって、彼女たちに感謝の気持ちを持つとともに、学習への意欲が湧いてきた。

◆この文章を読んで、卒業式とは「時間と場所の区切りをつける」という未来志向の場なのだ気付いた。卒業に自分の意思がはたらいっているとあまり感じたことがなかったが、新たな世界へ旅立つ踏切板なのだと思った。

女性の大学入学の話で、この3人は認可されていないのを承知で進学を希望し、合格したということに、物凄い意志の力を感じた。大学もその後の人生も気力と体力で生き抜いていくのだと思った。今あるものは誰かの残した結果であり、享受できる自分も何かを残さなくてはと考えさせられた。

大正十五年本科卒業専攻科卒業
 大正十五年本科卒業津田英學塾卒業
 前出
 昭和二年四年より東京音樂學校入學

英國(英語) 宇野滿壽子
 米國(數學) 中村 靜
 佛國(物理學) 湯淺年子
 獨逸(音樂) 宮内鎮代子

高等教員檢定合格者

昭和五年本科卒業東京女子大卒業

英語 杉森のぶ

一六 服 装

昭和七年四月制定の通學服は昭和十四年度迄實施された。然るに戰時下物資節約とス・フ織物使用の關係よりこの通學服は改善の必要を感じ、昭和十五年度に至り次の圖のやうな通學服を考案實施した。

此の型は昭和十四年二月全國高等女學校長協會の懸賞募集に當選せるものに、多少の工夫改色を加へたものである。翌十六年文部省が全國の女生徒制服を制定するに及び同年四月入學の生徒から之を着用せしむることになつた。但し帯は在來のものを文部省規定通りの幅(三・五釐)にして牌は從來のものを使用することとした。

尚昭和十三年度より郊外圍に於て作業する爲定められた服装は次の通りである。長袖ブラウス(型は隨意)・ブルーマー ス・地下足袋・ゲートル・麥藁帽子。防空用は之に準じ被り物は風呂敷又は布製帽子とする。

東京女子高等師範學校附屬高等女學校通學服
 昭和十五年四月より實施

一 夏季用
 (1) 上衣
 地質 富士絹・ペン
 ・オクリン
 (自分の開學校にて
 指定)
 特色 白
 丸符又はホリッ
 袖口
 左胸の通り
 通し
 左胸部
 パン
 の上部
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として

(2) スカートの
 地質 富士絹・ペン
 ・オクリン
 (自分の開學校にて
 指定)
 特色 白
 丸符又はホリッ
 袖口
 左胸の通り
 通し
 左胸部
 パン
 の上部
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として

二 冬季用
 (1) 上衣
 地質 富士絹・ペン
 ・オクリン
 (自分の開學校にて
 指定)
 特色 紺
 丸符又はホリッ
 袖口
 左胸の通り
 通し
 左胸部
 パン
 の上部
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として

(2) スカートの
 地質 富士絹・ペン
 ・オクリン
 (自分の開學校にて
 指定)
 特色 紺
 丸符又はホリッ
 袖口
 左胸の通り
 通し
 左胸部
 パン
 の上部
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として
 注意 履き用として

ダンス「ファウスト」について

ダンス「ファウスト」はグノーのオペラ「ファウスト」のワルツに合わせ、アメリカ人教師ギルバートが振付けたダンスです。日本の女子体育の先駆者で本校の教官であった井口阿くりが、留学先のアメリカでギルバートから直接このダンスを学び、明治36（1903）年に帰国して、日本に広めました。

この振り付けにはいくつかのヴァージョンがあり、生徒の誰もが踊れる学校ダンスとして、現在でも学習院女子中・高等科などいくつかの学校で踊り継がれています。

本校では運動会でこのダンスが踊られました。明治36年12月10日発行の雑誌「風俗画報」によりますと、当時の本校の運動会は入場券が配られ、2千人の観客を集めるという盛大なものでした。なかでもこの「ファウスト」は呼び物で、日露戦争後の明治39（1906）年には傷病兵の慰問のため運動会を陸軍戸山学校校庭で行いました。袴の上にこの年できたばかりの徽章の付いたベルトを締め、長い着物の袖にタスキがけをした女高生の姿が大きな喝采を博した、と記録にあります。

戦後は昭和21（1946）年からの運動会、そして昭和23（1948）年に始まったダンスコンクールで、「ファウスト」が踊り継がれてきました。当時は学年単位でダンスを踊り、3年生が「ファウスト」を踊るのが慣例となっていました。3年生の「ファウスト」は下級生の憧れだったそうです。

本校卒業生で元校長の前田侯子先生のお話によると、第一回ダンスコンクールは校庭にアップライトピアノを持ち出して、音楽は生演奏でおこなわれました。ピアノを担当されたのは井内澄子（いのうちすみこ）さんで、のちにピアニストになりました。今考えると生演奏の伴奏とはとても豪華ですが、それは当時レコードもカセットも放送施設も、何もなかったからでした。食べるものも衣装の布も何もなかったけれど、ダンスを踊れる時代になったのだと思うととてもうれしかった、と先生はお話されました。

昭和45（1970）年は生徒会活動のあり方の議論が続き、ダンスコンクールは行われませんでした。そして昭和48（1973）年、3年生の一部が制服姿で踊ったのが「ファウスト」の最後となり、以後本校では踊られなくなりました。今日ここで踊られる「ファウスト」は、35年ぶりの「ファウスト」となります。今回は当時生徒として実際に踊られた卒業生の方々と、現役の高校3年生有志のコラボレーションとなりました。



写真A



写真B



写真C



写真D



写真E



写真F



写真G



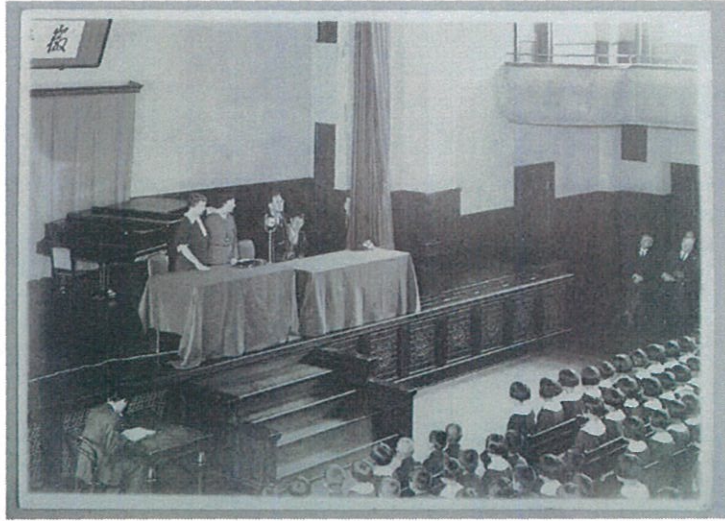
写真H

| 九月二十日(火曜日) | | 天候 | | 午後曇 | | 日誌 | |
|------------|-----|-------|---|------|----|----|----|
| 時限 | 學科 | 教官 | 受業事項 | 一般記事 | 席 | 缺 | 者 |
| 1 | 裁縫 | 宮嶋 石井 | 袖くくりをあらわしました | 全席 | 全席 | 全席 | 全席 |
| 2 | 同 | | 背縫いをして又記名検査が所産居ました | 真弓 | 真弓 | 真弓 | 真弓 |
| 3 | 習字 | 田田 先生 | 「はなを安をち後由女美之志比毛世才糸舞」の所を初習い致しました | 野口 | 野口 | 野口 | 野口 |
| 4 | 英目次 | 高取 先生 | 十六課(三)の所を発音と綴をわ | 中山 | 中山 | 中山 | 中山 |
| 5 | 口話 | 高取 先生 | 習いし又昨日の復習を教ました記名検査 | 野口 | 野口 | 野口 | 野口 |
| 6 | 体操 | 高取 先生 | 瀬戸内海を自分々々で調べ紙に書きました | 井出 | 井出 | 井出 | 井出 |
| 任擔印 | 備考 | | 二年二年・蘭菊共に急変口行進曲の練習を致しました奥田良三先生が来て下さりました | | | | |

| 九月二十日(水曜日) | | 天候 | | 午後曇 | | 日誌 | |
|------------|-----|-------|---|------|----|----|----|
| 時限 | 學科 | 教官 | 受業事項 | 一般記事 | 席 | 缺 | 者 |
| 1 | 体操 | 高取 先生 | 愛國行進曲のダンスを三番まで全部お習ひ致しました | 全席 | 全席 | 全席 | 全席 |
| 2 | 作文 | 高取 先生 | 日記を一日二日書いて先生にお出ししました | 安永 | 安永 | 安永 | 安永 |
| 3 | 英目次 | 高取 先生 | 十六課の復習と五五頁をおならひ致しました | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ |
| 4 | 英目次 | 高取 先生 | ローマ存の綴りや名前を書いたり致しました | 乾 | 乾 | 乾 | 乾 |
| 5 | | | 教室・廊下等のお掃除をして講堂に集りヒットラー・エージェント歓迎の式が御おりました | 横井 | 横井 | 横井 | 横井 |
| 6 | 國語 | 高取 先生 | 瀬戸内海の所を大休意味等と調べました | 泉谷 | 泉谷 | 泉谷 | 泉谷 |
| 任擔印 | 備考 | | ピアニの合図で禮があり校長先生のお祝のお言葉もその後のお言葉がありヒットラー・エージェントのお迎への歌を二度歌ひて式が終りエージェントの方々は退場され校内を色々御見學になりました | | | | |

東京女子高等師範學校附屬高等女學校學級日誌用紙

写真「本一菊」



写真J



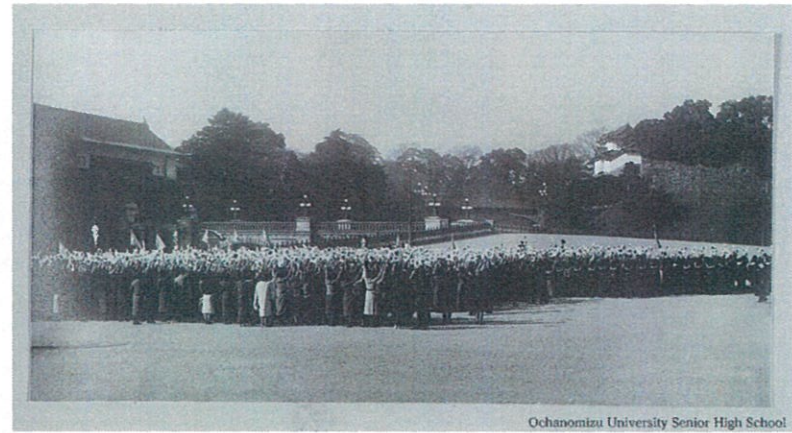
写真K

| | | | | | |
|-------------|--------------|--|--|---------------|--|
| 四月二十六日(月曜日) | | 天候 雨後晴 | | 日誌 當番 | |
| 時限學科教官 | | 受業事項 | | 一般記事 | |
| 1 | 代中沢先生 | 此例についてお習ひし問題第五を致しました。 | | 池田 | |
| 2 | 幾野田先生 | 此の例題も致しました。 | | | |
| 3 | 容事 堀島 割烹 杉先生 | 割烹は、各々で胚芽米をたまき、清汁、野菜煮物をつくりました。 | | 者席缺 | |
| 4 | 容事 官島 割烹 杉先生 | 十一時四十分の電鈴で体操場に集り、主事先生よみ明日の臨時大祭やヘレンケラー女史の事について伺いました。 | | 者課缺 | |
| 5 | | ヘレンケラー女史が學校にどうして来るので午後一時講堂に集まりました。一時半頃女史はもういなくなってしまいましたが、その様子にみちみちたお顔を見事拝観した時、船定は何ともしない親しみと温かさを感んできました。女史の生誕をとりこむにはお話しになり、ケラー女史も私達にお話しを下さりました。私達は三重苦の聖心とはこれぞケラー女史に接する事が出来、本堂に帰ると感激するばかりです。私達は三重苦の聖心とはこれぞケラー女史に接する事が出来、本堂に帰ると感激するばかりです。 | | 者刻遅 | |
| 6 | | 有難き思い出です。 | | 者者者 | |
| 任擔印 | 水 | 東京女子高等師範學校附屬高等女學校學教日誌用紙 | | 番當室教者刻遅者課缺者席缺 | |
| 考備 | | 教室 第一列 | | 特別室 第六列 | |

写真L「本五菊」

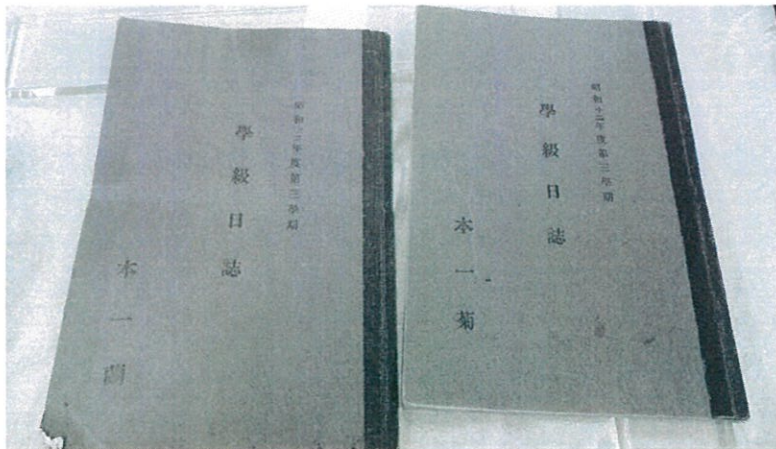


写真M



Ochanomizu University Senior High School

写真N



「学級日誌」表紙



写真O

二月十五日(水曜日)

| | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 任職印 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時限學科教官 |
| 考備 | | | | | | | 十二月十四日(火曜日) |
| | | | | | | | 受業事項 |
| 都築 | | | | | | | 南京陽著祝賀大行進の爲、朝七時半集合八時頃出發し、博覧館かう大曲・飯田橋・九段を過ぎ宮城を解いて、後、靖國神社を參拜し、百合合高女で休み十一時五十分歸途につき、牛込仲樂坂・矢來下・音羽を経て、午後二時近く學校につきまゝ、それから本校のグラウンドで女高師の萬歳を三唱して、総り、御舞臺を頂いて歸りました。 |
| さん | | | | | | | さんは行進に不参加受 |

写真P「本一蘭」

二月十五日(水曜日)

| | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 任職印 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時限學科教官 |
| 考備 | | | | | | | 十二月十四日(火曜日) |
| | | | | | | | 受業事項 |
| | | | | | | | 南京陽著祝賀大行進の爲、朝七時半集合八時頃出發し、博覧館かう大曲・飯田橋・九段を過ぎ宮城を解いて、後、靖國神社を參拜し、百合合高女で休み十一時五十分歸途につき、牛込仲樂坂・矢來下・音羽を経て、午後二時近く學校につきまゝ、それから本校のグラウンドで女高師の萬歳を三唱して、総り、御舞臺を頂いて歸りました。 |

写真Q「本五蘭」

二月十五日(水曜日)

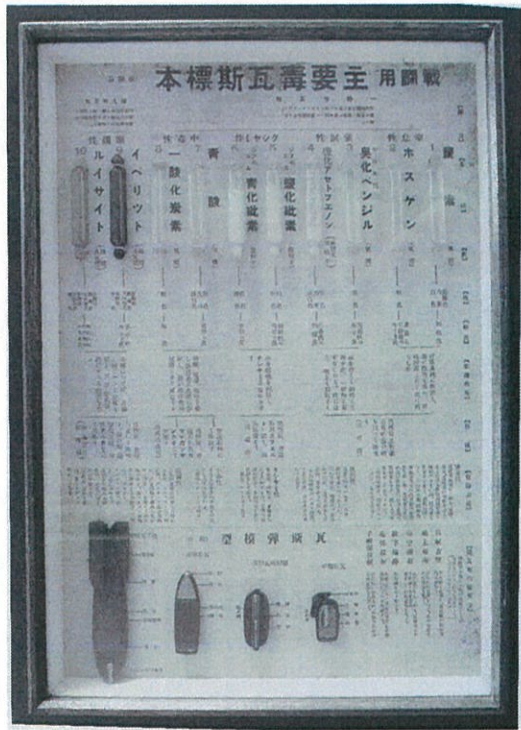
| | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 任職印 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時限學科教官 |
| 考備 | | | | | | | 十二月十四日(火曜日) |
| | | | | | | | 受業事項 |
| | | | | | | | 南京陽著祝賀大行進の爲、朝七時半集合八時頃出發し、博覧館かう大曲・飯田橋・九段を過ぎ宮城を解いて、後、靖國神社を參拜し、百合合高女で休み十一時五十分歸途につき、牛込仲樂坂・矢來下・音羽を経て、午後二時近く學校につきまゝ、それから本校のグラウンドで女高師の萬歳を三唱して、総り、御舞臺を頂いて歸りました。 |

写真R「本五菊」

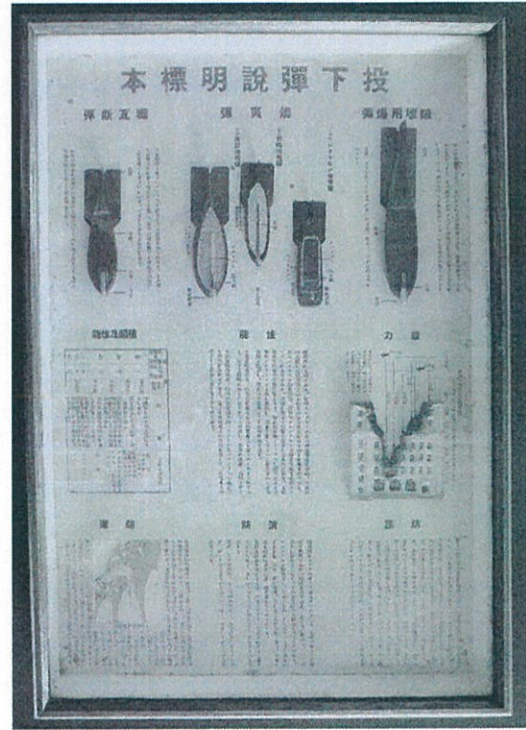
十二月十四日(火曜日)

| | | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|---|---------------------------------------|
| 任職印 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 時限學科教官 |
| 考備 | | | | | | | 十二月十四日(火曜日) |
| | | | | | | | 受業事項 |
| | | | | | | | 今日は南京陽著の祝意を表し、皇軍の武運長久を祈る爲に、旗行列を致しました。 |
| | | | | | | | 午前七時三十分集合 |
| | | | | | | | 飯田橋 |
| | | | | | | | 九段下(神樂坂) 堀端(上重橋) |
| | | | | | | | 復路 櫻田門(半蔵門) 九段(神樂坂) 神樂坂 江戸川 護國寺門(正門) |
| | | | | | | | 下校は二時頃でした。 |
| | | | | | | | 旗行列に参加しない方は、腹子校で自習(足女橋本・矢部・谷) |
| | | | | | | | 今日お當番は致しません。 |

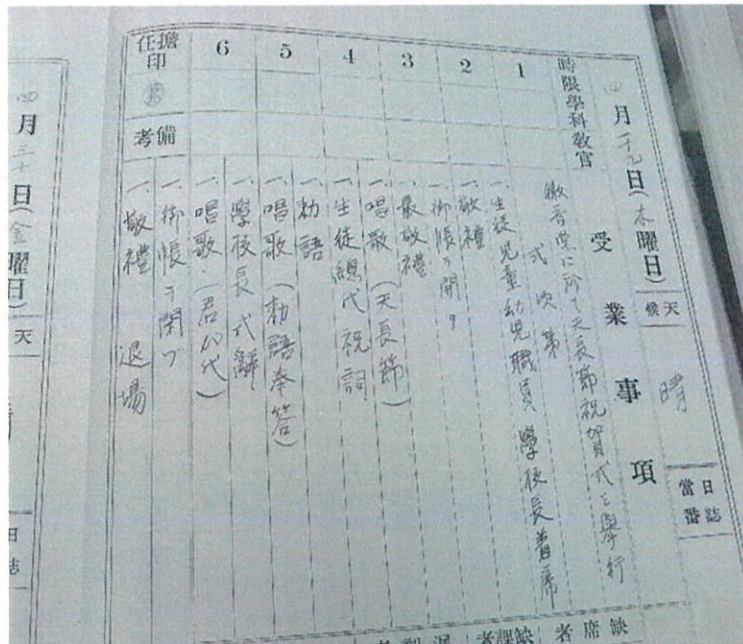
写真S「本一菊」



写真T



写真U



写真V「専三家」



写真W

- 1 2006年度に研究プロジェクト「校史資料」を立ち上げ、学校史資料の教材化をすすめ、生徒自身につながる近現代史などの授業、学習を創造すること、女子教育における本校の歴史的、社会的活動を明らかにし、生徒、教員の理解を深めることを目的として、より意識的に学校史資料の教材化に取り組んだ。当初は「校史資料」の語を用いていた。
- 2 他の学校史資料の教材化にふれている。
- 3 3階司書室に保管されている。昭和13年7月、12月、東京女子高等師範学校附属高等女学校校友会発行。
- 4 「下村壽一先生作詞、小松耕輔先生作曲」の楽譜がある。
- 5 矢越葉子・平松左枝子・奥田環・鷹野光行「資料で見る東京女子高等師範学校と戦争」『お茶の水女子大学博物館実習報告』第21号(2006)より
- 6 日本ライトハウスのウェブサイト<http://www.lighthouse.or.jp/helenkeller.html>には、来日時「ヘレンがポリーに口話法で話したり尋ね、ポリーの言葉はヘレンがポリーの喉、口、鼻腔に指をあてる読唇法で理解し、ポリーの英語は岩橋武夫が通訳する、といった形で行われた」とある。また、ある写真を見るとヘレンはポリーの右隣に座り、左手をトムソンの右の顔に当て、親指を喉、人差し指を唇、中指と薬指と掌の上部を頬、小指を目尻の脇に置いている。
- 7 ウィリアム・ギブスン作、原題は「The Miracle Worker」。「奇跡を起こした人」とは、本来はヘレンが学んだボストンのパーキンズ盲学院の校長が、アン・サリヴァンを賞賛、紹介したことばである。(筑摩書房編集部『ヘレン・ケラー 行動する障害者、その波乱の人生』筑摩書房 p.51)
- 8 本名メアリー・アグネス・トムソン、ポリーは愛称。1914年よりヘレンとサリヴァンの家政婦兼秘書となった。
- 9 ヘレン・ケラーとポリー・トムソンは1937年3月26日に鉄道でニューヨークを発ち、4月1日に浅間丸でサンフランシスコを出発、15日横浜に到着、7月9日横浜から朝鮮、「満州」へ出発し、8月10日に横浜港より秩父丸で帰国した。ヘレンは往路の2週間、短時間で思いが伝わるよう講演原稿を何度も書きなおしたという。また小説『風と共に去りぬ』(前年の1936年に出版、点字版で18巻)を読み、南部アラバマでの子ども時代をふりかえり、人種意識・階級意識を思い起こしたという。(ニールセン『ヘレン・ケラーの急進的な生活』p.124)
- 10 1934年9月、「ニューヨーク・タイムズ」その他の新聞紙上で厳しく批判した。(山崎邦夫編著『年譜で読むヘレン・ケラー』p.164)
- 11 フランクリン・D・ローズヴェルトは1921年39歳の時にポリオに罹り、下半身麻痺のため車椅子が必要な障害者となった。しかしそれは国民には注意深く伏せられていた。
- 12 来日直後の4月17日には新宿御苑の観櫻園遊会に招かれ、特別な扱いで天皇と握

手をし、首相林銑十郎を官邸に訪問した。18日には歓迎会が東京會館で行われ、林首相ら500人が参列した。

- 13 この第39号は全30ページで、他の号と比べ極端にページ数が少ない。巻末の「編輯だより」には「號數を増します一方、紙數を減じねばなりませんので毎號お書き下さいます校長先生諸先生の文も、號毎に盛んになってまゐりました自由投稿もこの號は、お休みすることになり、大變残念に思つて居ります。」とある。このような状況下でも、ヘレン・ケラーの講演会は大切な記録として残された。
- 14 ヘレンは前夜25日、19日より滞在していた大阪から特急燕号で帰京した。26日は午後1時女子高等師範学校での講演会、2時文部省で盲啞関係者の懇談会、4時温故學會の懇談会という予定が組まれていた。
- 15 ヘレンは自分のたどたどしい演説が聴衆の迷惑にならぬよう、できるだけ短いメッセージを心がけて講演の準備したという。
- 16 1937年7月10日付け朝日新聞より
- 17 朝日新聞、読売新聞を調べると、来日直前から連日のように報道されていたヘレン・ケラーの記事は、5月以降少しずつ間遠になっていく。朝鮮、「満州」、台湾訪問の記事は本社版を見る限りほとんど現れない。
- 帰国を伝える8月12日の読売新聞は、「江岸の避難者横濱へ」（「神戸經由上海から横濱へ入港した郵船秩父丸で漢口、上海方面の避難者百卅五名が歸朝した。」に始まる記事）に二段目の見出し「三重苦の聖女歸る」を添え、「同船で鮮満、京阪地方を講演行脚」していたヘレン一行もこの秩父丸で神戸からやってくる、12日「横濱出帆の同船で歸國する。」と16行の記事と写真で短く伝えるのみである。
- 同日の朝日新聞でも、「満州」、台湾の講演旅行を終え、神戸から秩父丸に乗船、横浜港に入港、横浜では上陸せずに12日帰米する、との15行の小さい記事で、翌13日に講演会収入が寄付されるとの短信がある。華々しい来日当初との違いは大きい。また、アメリカ大使グルーが、日米関係においてヘレン・ケラーの来日はペリー来航に並ぶと評価しているとも伝えている。
- 18 http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/m_ph/m_ph_3281-0001.html
関連資料として『校報』第425号、『お茶の水』第39号が挙げられている。
- 19 http://archives.cf.ocha.ac.jp/pic014_nankin.html
ここには32枚の写真があるが「南京陥落」関連は25枚で、後半の7枚は1938（昭和13）年の「漢口陥落」に関連する写真である。
- 20 当時は一般的な風俗として、誰もが帽子を被っていた。
- 21 戦前の附属高等女学校は蘭組、菊組の2クラスで、戦後新制高校となって梅組が加わり、1学年3クラスとなった。
- 22 一部欠損もあるが、戦前のものはほぼ保存されている。
- 23 1937（昭和12）年12月11日の朝日新聞には、「踊出した提灯行列 昨夜雨の帝都の賑い」と、『陥落公表』を待ち 祝賀の進行 昼夜歓喜の坵場へ」の記事がある。

- 24 九段精華高等女学校か。
- 25 靖国神社に隣接する現白百合学園中学高等学校
- 26 社会科準備室にはガリ版刷りの薄い冊子で「防毒」「救急」の講習資料がある。
- 27 お茶の水女子大学「ラジウム発見 100 年記念事業実行委員会」発行 1998 年
- 28 しかしイレーヌは 2 カ月で辞任した。
- 29 拙稿「3 年必修「現代社会」憲法第 24 条と私たち」(『研究紀要』第 51 号 2005 年度)
- 30 1998 年に本学で行われた「ラジウム発見 100 周年」記念講演では、本学理学部化学科教授として司会を務められた。
- 31 松岡映丘作「明治天皇像」<http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/da/da0010.html>
- 矢澤弦月作「昭憲皇太后」<http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/da/da0011.html>
- 32 http://archives.cf.ocha.ac.jp/shiryo_shoseki.html
- 33 拙稿「ヒトラー・ユーゲントがお茶高にやって来た」(『研究紀要』第 54 号 2008 年度)
- 34 「みがかずば玉もかがみもなにかせん 学びの道もかくこそありけれ」<http://archives.cf.ocha.ac.jp/exhibition/da/da1010.html>
- 35 明治 8 年の東京女子師範学校の開校式が行われた日には、式後皇后臨席のもとに生徒代表 3 名が講話を行い、吉川若菜が撰理中村正直の『西国立志篇』を講じている。東京女子高等師範学校編『東京女子高等師範学校六十年史』(1934 年)によれば、校歌となった「みがかずば」はこの翌年 2 月 15 日に下賜された。但し『お茶の水女子大学百年史』(1984 年)では明治 8 年 12 月 20 日としている。
- 36 この号には「最近十箇年變遷概要」として創立 50 周年記念誌以降 10 年間の記録がまとめられ、貴重な資料となっている。校友会は文部省の訓令により、1941 (昭和 16) 年度より学校を主体とする公的な報国会に改編され、総務、国防、鍛錬、文化、生活の 5 部のもと「報国精神に基づく心身一体の修練施設として新発足」したと説明がある。
- 37 拙稿「120 周年記念バッグ(通称「お茶高バッグ」)の誕生と若干の考察」(『研究紀要』第 49 号 2003 年度)
- 38 三浦良子「校内ダンスコンクールについての報告(3) - 49 回の軌跡 -」(『研究紀要』第 44 号 1998 年度)より
- 39 拙稿「学校新聞『お茶の水』の整理・収集・保存 - 創立 130 周年に寄せて -」(『研究紀要』第 58 号 2012 年度)縮刷版は学校保管のほか作楽会、お茶の水女子大学図書館、国会図書館、お茶の水女子大学歴史資料館に寄贈した。
- 40 1939 (昭和 14) 年 7 月発行の校友会会誌『お茶の水』第 48 号に、中澤伊與吉主事が蘭菊の図柄の説明も含めて「我が校の徽章」を記している。
- 41 本学教授、ドイツ文学者・詩人。「さくらの花の散る下に、小さな屋根の駅がある。」に始まる詩「花ふぶき」の作者でもある。